

# 琉球大学学術リポジトリ

## モーダルな文のタイプと焦点化助辞 (おぼえがき)

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学法文学部 公開日: 2011-06-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: かりまた, しげひさ, Karimata, Shigehisa メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/20353">http://hdl.handle.net/20.500.12000/20353</a>

# モーダルな文のタイプと焦点化助辞（おぼえがき）

かりまた しげひさ

英文要旨：A phenomenon very similar to the Old Japanese *dzo*-type *kakari musubi* is seen in Ryukyuan dialects. When the particle *du* is placed immediately after a subject, complement or adverb, the *rentai*, adnominal, form follows to complete a sentence. Since the particle *du* not only behaves like the *kakari*-particle but also phonetically sounds much alike, the phenomenon in question is often considered to be *kakari musubi*.

However, in some dialects of the Ryukyuan language, the particle does not call for an adnominal form in the *musubi* or predicate. Conjugational forms in the predicate vary from dialect to dialect. Furthermore, in Ryukyuan there are other types of particles similar to the *kakari*-particle *dzo* such as *ga*, *kuse*, *nu* and *ru*.

This paper investigates what conjugational forms these particles, including *du*, call for to end a sentence and also reveals how these particles function in Ryukyuan.

## 1. はじめに

沖縄島の諸方言では、助辞=duが文の部分（主語、補語、状況語<sup>1)</sup>）に後接すると、文末に特定の述語形式があらわれる。=duの音声形式が古代日本語の「ぞ=dzo」に似ているだけでなく、=duに呼応する述語形式が連体形と同音形式であることから、=duを古代日本語の「ぞ」とおなじく係助辞とよび、=duと述語形式が呼応する現象を“係り結び”とよぶことがある。しかし、琉球方言には=duが特定の形式と呼応しない下位方言があるし、=duのあらわれる文の文末にさまざまな述語形式があらわれ、文の通達的なタイプにもいくつも

の変異がみられる。

琉球方言には=duのほかに、類似のはたらきをする助辞がみられる。沖縄島南部那覇市泉崎方言や中部のうるま市安慶名方言には=gaがあり、沖縄島北部の今帰仁村謝名方言には=gaと=kuse:がある。宮古島市平良下里方言には=gaと=nuがあり、宮古伊良部島仲地方言には=gaと=ruがある。石垣島の四箇方言には=du以外にはみられない。以下、安慶名方言の用例は略称のAを、謝名方言はJを、下里方言はSを、仲地方言はNを、石垣四箇方言はIを例文の先頭につけてしめす。泉崎方言の例は、外間美奈子（1994）のことわざ資料を使用しているので、掲載された通し番号を例文の末尾に付す。また四箇方言の例として宮城信勇（1977）のことわざ資料を利用する。これも掲載された通し番号を末尾に付す。問題となるとりたて助辞は、二重ハイフン=でしめし、格助辞が前接するときは、名詞と格助辞のあいだにハイフンを付してしめす。

=du、=ga、=nu、=ru、=kuse:は、主格の=nu、=gaをふくむすべての連用格の形に後接する。これは、=ja（は）、=N（も）などのとりたて助辞<sup>2)</sup>が名詞の連用格に後接して格=とりたての形をつくるのとおなじである。述語動詞、述語形容詞、述語名詞をとりたてる形態論的な手続きのしかたも、=ja、=Nのばあいとおなじである<sup>3)</sup>。=du、=ga、=nu、=ru、=kuse:は、=ja、=Nとパラディグマティックな関係にあり、同一の文の部分には共存せず、=du、=ga、=nu、=ru、=kuse:を=ja、=Nと同じとりたて助辞とみることができる<sup>4)</sup>。

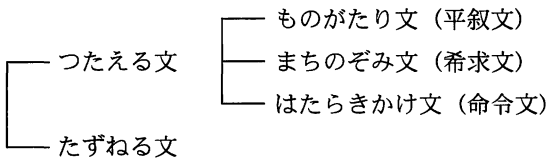
=duと呼応する述語形式が連体形と同音形式であることから、文末にあらわれるにもかかわらず、連体形とよぶものもある。しかし、連体形という名づけが文中での機能、すなわち、名詞にかかって名詞（体言）を修飾する機能によるものであるとするなら、文末にあらわれ、文末の述語としてテンス・アスペクト・ムードをあらわし、文のモダリティーの表現に関与する形式は、他の文末にあらわれる述語形式とおなじく終止形である。本稿では=duと呼応する述語形式を強調形とよぶ。

本稿では焦点化の機能をもつとりたて助辞（以下、焦点化助辞と略称）=du、=ga、=nu、=ru、=kuse:がどのような陳述的なタイプの文にあらわれ、どのような述語形式と呼応するのかを検討し、=du、=ga、=nu、=ru、=kuse:のは

たらきをかんがえる<sup>5)</sup>。

## 2. モーダルな文のタイプと焦点化

焦点化助辞は、その種類、あらわれる文の陳述的なタイプが下位方言ごとにことなる。琉球方言の文を次の陳述的なタイプに分類する<sup>6)</sup>。つたえる文の下位タイプの分類もいくつかのものがあるが、本稿では、ものがたり文にはいいきり文、おしはかり文、うたがい文、のみつつの下位タイプを、たずねる文には、肯否たずね文、疑問詞たずね文の下位タイプをとりあげて、焦点化助辞のあらわれかたをみる。



泉崎方言や安慶名方言のばあい、いいきり文とおしはかり文、肯否たずね文に=duがあらわれ、うたがい文に=gaがあらわれる。謝名方言のばあい、いいきり文、肯否たずね文に=duがあらわれ、うたがい文に=gaがあらわれ、おしはかり文に=duと=kuse:があらわれる。泉崎方言も安慶名方言も謝名方言も、疑問詞たずね文にはどんな焦点化助辞もあらわれない。

下里方言のばあい、いいきり文とおしはかり文には=duがあらわれ、肯否たずね文には=nuがあらわれ、疑問詞たずね文には=gaがあらわれる。仲地方言のばあい、いいきり文とおしはかり文には=duがあらわれ、肯否たずね文には=ruがあらわれ、疑問詞たずね文には=gaがあらわれる。四箇方言には=duしかみられず、=duはいいきり文、おしはかり文、肯否たずね文、疑問詞たずね文にあらわれる。

泉崎方言、安慶名方言、謝名方言、仲地方言、下里方言、四箇方言のいずれにおいても はたらきかけ文 (命令文、さそいかける文) と独立語文には焦点

化助辞があらわれない。

(表1) 文のタイプと焦点化助辞のあらわれ方

	謝名方言	安慶名方言	下里方言	仲地方言	四箇方言
いいきり文	du ~ru	du ~ru	du	du	du ~u
おしはかり文	du~hadʒi kuse:~ra	du ~hadʒi	du ~padz	du ~padz	du ~hadz
うたがい文	ga ~ra	ga ~ra			
肯否たずね	du	du ~rui	nu	ru	du ~u
疑問詞たずね	ゼロ ~ga	ゼロ ~ga	ga ~ga ga ~ja	ga	du ~ja

### 3. いいきり文における焦点化と呼応する述語の形式

泉崎方言、安慶名方言、謝名方言、下里方言、仲地方言、四箇方言のいずれにも、いいきり文には=duがあらわれ、=duを後接させた文の部分が焦点化される。

謝名方言、安慶名方言、四箇方言では、文中に=duがあらわれるとき、文末の述語が強調形と呼応する。安慶名方言と四箇方言の強調形は断定形と異なるが、連体形とホモニムである。泉崎方言、安慶名方言の断定形には=sa:、=do:、=te:、=ja:などの終助詞が後接してモーダルな意味を付加するが<sup>7)</sup>、=duと呼応してあらわれる強調形にはいかなる終助詞も後接しない。

- 1) ?i:bi=ja ma:-Nkai u:ri:ga. ?i:bi=ja ?utʃi-Nkai=du magajuru. 諺042  
(指は どこに 折れるか。指は 内にコソ 曲がるのだ。)
- 2) ku:saini-kara magajuru ki:-nu=du magajuru. 諺179  
(幼いころから 曲がる 木がコソ 曲がるのだ。)
- 3) nusuro: mutʃuru ?ussa=ru mutʃuru. 諺413  
(盗人は 持つ 分だけ 持つのだ。 (持てるだけしか持たない))

- 4) ʔagaiti:da=du ugamuru. sagaiti:da: ugamaN. 諺008  
 (上がる太陽をコソ 拝むのだ。下がる太陽は 拝まない。)
- 5) ʔaini=du ta:-nu midʒe: kuNte:suru. 諺002  
 (有るときにコソ 田の 水は 使い捨てるのだ。)
- 6) ʔikiramun=du nukujuru. 諺053  
 (少ない物コソ 残るのだ。)
- 7) ʔe:kiNʃu=N nu:=N ʔaraNdo:na:. ʔataime:-nu harusa:=du jaru.  
 (金持ちでも 何でも ないよ。 普通の 百姓なんだ。  
jaʃiga. na:=ja kurika:-nu ttʃu=du jaNʃe:ru. 多幸山P.30  
 (しかし、あなたは このあたりの 人で いらっしゃいますか。)
- 8) ki:=N ʔo:saru ʔe:da=du tamirari:ru. 諺168  
 (木も 青い 間コソ 曲げられる。)
- 9) <sup>A</sup> tigame: wa:-ga=du katʃuru.  
 (手紙は 私がコソ 書くのだ。)

四箇方言も、文の部分をも=duで焦点化すると、いいきり文のいいおわりの述語は強調形であられる<sup>8)</sup>。断定形とはことなり、連体形とホモニムである。

- 10) <sup>L</sup> aka-nu taniN-nu=du jumi-N nari, muku-N naruru. 諺10  
 (あかの 他人がコソ 嫁に なり、 婿に なるのだ。)
- 11) <sup>L</sup> attarasa:r1 hwa:=du idz1. 諺21  
 (かわいい 子をコソ 叱るのだ。)
- 12) <sup>L</sup> ame: hui=du dz1:=ja katamaru. 諺46  
 (雨が 降ってこそ 地は かたまるのだ。)
- 13) <sup>L</sup> aramunu hwoija=du du:dzu:sa:ru. 諺55  
 (粗食を 食べてコソ 丈夫なのだ。)
- 14) idzu-nu=du idzo: hwo:. p1tu-nu=du p1to: hwo:. 諺87  
 (魚がコソ 魚は 食うのだ。 人がコソ 人は 食うのだ。)

15) atuhu:=du      ma:hu:. 諺33

(後の幸運がコソ 真の幸運だ。)

いっぽう、謝名方言の強調形非過去su:ru (する)、連体形非過去su:nu (する)、断定形非過去suN (する) の3者は形が異なる。

16) <sup>u</sup>?aNtzi nitzi: ?ainumuNnu, figu'tu su:nu tzu:nu 'uNna:.

(そんなに 熱が あるのに、 仕事を する やつが いるか。)

?isanu ja:-kat'i=du ?itzuru.

(医者の家(病院)に いくんだよ。)

17) <sup>u</sup> neNgadʒo:ja ta:-ga hatʒuga. ?ja:-ga=du hatʒuNna: ?

(年賀状は 誰が 書く? おまえが 書くの?)

tʒattʒa:-ga=du hatʒuru. wa:gaja hak'aNdo:.

(父が 書くのだ。 私は 書かないよ。)

18) <sup>u</sup> gakk'o:nu kut'uja ʃiNʃi:-ga=du waharuru. watt'a:gaja

(学校の ことは 先生が 分かるんだ。 私たちには

waharanu.

わからない)。

19) <sup>u</sup>ʃit'iruNditʒi ?utʒe:t'arumuNnu nu:ditʒi k'a:t'aga? ja:sa=du ?ait'i:.

(捨てようと 置いてあったのに どうして 食べたんだ? 腹が空いていたのか。)

?at'arase:t'u=du      k'a:t'aru.      ja:saja neNt'aNdo.

(もったいないから、 食べたんだ。 腹は空いていなかったよ。)

下里方言も仲地方言もいきり文の部分>=duで焦点化できるが、呼応する専用形式をもたず、“係り結び”は見られない。下里方言、仲地方言が泉崎方言、安慶名方言、謝名方言、四箇方言などとおおきことなる点である。下里方言も仲地方言も=duで焦点化された文の部分をもつ文のいいおわりの述語にm語尾断定形をすえることができない。m語尾断定形を述語にもつ文のモーダルな意味と=duが共存しないのであろう。

下里方言の非m語尾断定形kaks（書く）、kugz（漕ぐ）は、第一中止形kaks、kugz、連体形kaks、kugzと同音形式であり、saks（先）、iks（息）、mugz（麦）、fgz（釘）などから、kaks、kugzが日本語の第一中止形（検定教書文法の“連用形”）に対応する \*kaki、\*kogiに由来する形式であることがわかる。

- 20) <sup>s</sup>tigamju:=ba: baga=du kaks.  
 (手紙は 私がコソ 書く。)
- 21) <sup>s</sup>azks pagz-nu=du pss0:=ba: kiz.  
 (歩く 足がコソ つま先を蹴る。)

仲地方言の非m語尾断定形kaf、kuvは、連体形kaf、kuv、第一中止形kaf、kuvと同音形式である。jaf（厄）、ifsa（戦）などから、kafが“終止形”あるいは“連体形” \*kakuに由来する形式であることがわかる<sup>9)</sup>。仲地方言のばあいも、m語尾終止形を述語にもつ文には=duがあらわれない。述語形式のちがいがどんなモダリティーの違いをうんでいるのか现阶段ではあきらかではない。

- 22) <sup>N</sup>tigamju:=ba: a-a=du kaf.  
 (手紙は 私がコソ 書く。)
- 23) <sup>N</sup>tigamju:=ba: am=mai kafm.  
 (手紙は 私も 書く。)
- 24) <sup>N</sup>kari-ga fa:nniba=du, am=mai fa:n.  
 (彼が 食わないので, 私も 食わない。)

=duは、命令文や勧誘文にあらわれないが、あわせ文になると、つきそい文やつづける文に=duがあらわれ、主文に命令文があらわれる。ひとえ文の命令文に=duがあらわれないのに、あわせ文になると=duがあらわれるのは何故か、その他のどんな通達的なタイプの文に焦点化助辞があらわれるのか、モダリティーの体系のなかでの焦点化助辞をふくむ文の位置づけについても未確認である。



25) <sup>N</sup>.jadu:=ba: aki:=du ukiba, i33iku:.

(戸は 開けておくから、入って来い。)

文中の=duに呼応して強調形があらわれる沖縄島諸方言にあっても、実際の会話のなかでは、強調形以外の形式のあらわれることがすくなくない。

26) ?ja:-ga tʃassa tudzi humitiN, wa: tudze: mafi, ʃigutu=dake: ?araN.

(おまえが いくら 妻を ほめても、俺の 妻が いい。仕事だけではない。)

ka:giʃigata jatiN wa: tudze: mafi.

容姿で あっても 俺の 妻が いい。) 豊年p.238

ka:giʃigata=duN jare: juku wa: tudzi=du mafi jaru. ?ja: tudzi-nu

(容姿なら かえて 俺の 妻がコソ いいのだ。おまえの 妻の

ka:ge: nu:-nu guto:Nde: ?umujuga. nio:butuki-Nkai=du nitfo:sa.

容姿は 何の ようだと おもう? 仁王像にコソ 似ているぜ。)

27) tʃumi N:dʒuru daki=du jagutu, miʃiti kwiNso:re:.

(一目 見る だけですから、 見せて くださいませ。)

miʃite: naraN ʃina jagutu jurutʃi kwiNso:re:.

(見せては ならない 品なので お許してください。)

?agidze:, N:dʒuru daki=du jasa. 多幸山P.32

(ええい、 見る だけだ。)

28) na:-ga turubato:ru tukuru N:dʒa:ni kwi: kakitaru ba:=du jaNde:na:.

(あなたが ぼんやりしているところを 見て、声を かけた わけなんですよ。)

?aN=du jarui. waNne: mata satʃi-nu ttʃu-tu nitfo:ru:=ga jara-Ndi

(そうなんだ。 私は また さっきの 人と 似たやつなのかと

?umuti tamaʃi nugitasa. 多幸山p.40

思っ て びっくりした。

29) ?akasaru ?utʃi-uti tʃina:baNdzu tʃitʃirawa=du naigutu, ?unumama

(明るい うちに 喜名番所に 着かなければ ならないから、このまま

tʃa: tu:issaja:. 多幸山p.26

ずっと 行こうね。)

また、動詞述語に強調形のあらわれやすいことわざにあっても、名詞述語文のばあい強調形のあらわれないものがおおい。

- 30) ttfu?ujame:=du      du:?ujame:. 諺316  
(人敬いコソ      自分敬いだ。) 諺516
- 31) ja:nare:=ru      hukanare:. 諺102  
(家の習い(が) コソ      外の習いだ。) 諺496
- 32) ?uko:=du      ko:ko:.  
(線香(が) コソ      親孝行だ。)
- 33) mu:tudzake:=du      judadzake:.  
(本(根元)栄え コソ      枝栄えだ。)

=duがあると文末の強調形にあらわれる泉崎方言、安慶名方言、謝名方言に  
おいても、=duはかならずしも強調形を要求しているわけではないのである。

#### 4. おしはかり文における焦点化と呼応する述語の形式

泉崎方言、安慶名方言、謝名方言、仲地方言、下里方言、四箇方言ともに、  
おしはかり文の部分を=duで焦点化することができる。おしはかり文の述語は、  
泉崎方言と安慶名方言ではkatfuru hadzi (書くだろう)、下里方言ではkaks  
padz (書くだろう)、仲地方言ではkaf padz (書くだろう) のように連体形  
に形式名詞hadzi、padzをくみあわせる。謝名方言ではhatzura padzi (書く  
だろう) のようにra推量形の連体形に形式名詞padziをくみあわせる。いずれ  
も合成述語である。

謝名方言には、=duによって焦点化されるおしはかり文とはべつに=kuse:に  
よって焦点化されるおしはかり文がある。=kuse:によって焦点化されるおし  
はかり文の述語はra推量形である。ra推量形は、総合的な単純述語である。謝  
名方言のpadzi推量形を述語にもつ おしはかり文の部分を=duで焦点化するこ  
とはできるが、=kuse:で焦点化することはできない。いっぽう、ra推量形を

述語にもつ文の部分を=kuse:で焦点化することはできるが、=duで焦点化することはできない。

#### 4.1 =duによるおしはかり文の焦点化

連体形と形式名詞hadzi, padzi, padzをくみあわせた合成述語は、文中に=duのあるおしはかり文に使用されるだけでなく、=duのないおしはかり文にも使用される。おしはかり文の特定の文の部分を=duによって焦点化するばあい、どの方言でも文末の述語が特定の形式をとることはない。形式名詞hadzi, padzi, padzをくみあわせた合成述語を述語にもつおしはかり文のばあい、文の部分を=duで焦点化しても、特定の形式と呼応するとはいえないのである。焦点化助辞と特定の述語形式との呼応（係り結び）の関係をかんがえるうえで重要である。

- 34) <sup>μ</sup> tara:ja ʔamaNt'i nu: tzi:ga?  
(太郎は むこうで 何を 切っているの?)

ʔju:=du tzi:ra padzido:.  
(魚をコソ 切っているだろう。)

- 35) <sup>μ</sup> ʔitt'a: warabi:=ja nu: tʒittʒut'aga?  
(お宅の 子は 何を 切っていた?)

dak'i:=du tʒittʒutara padzi.  
(竹をコソ 切っていただろう。)

- 36) <sup>A</sup> tigame: su:ga=du katsuru hadzido:.  
(手紙は 父がコソ 書くだろう。)

- 37) <sup>S</sup> tigamju:=ba: zza-ga=du kaks padz.  
(手紙は 父がコソ 書くだろう。)

おしはかり文にあらわれる=duは、その後接した文の部分のあらわすものごとに焦点をあてて おしはかりの対象をさしだす。たとえば、うえの34)、35)の例では、話者Aは、話者Bの子が何か切っているのは確認できたが、何を切っ

ているのかが不明で、話者Bに質問したが、話者Bも不確かながらそれ以前の状況から、切っているのが?ju: (魚)、あるいはdaki: (竹)であろうと、おしはかりの対象の?ju:, daki:をとりだしている。おしはかり文の=duは、話し手が知覚、認識しているできごとを構成しているものごとのうち、不確かな部分に対して、周囲の状況やそれ以前の前提となるできごとからおしはかったものを=duでさしだしているのではないかとかんがえる。

#### 4.2 =kuse:によるおしはかり文の焦点化

謝名方言のおしはかり文には=kuse:があらわれ、ra推量形と呼応する<sup>10)</sup>。ra推量形は検定教科書文法の“未然形”に見えるが、語末の\*mu (推量の助動詞\*muか)の脱落したものであろう。=kuse:はいいおわり文の文の部分にしかあらわれず、=kuse:の後接した文の部分のあらわすものごとが焦点化されたおしはかりをあらわす。与論島方言に類似の助辞=kusuがあり、ra推量形と呼応する<sup>11)</sup>。=kuse:、=kusuがどの範囲に見られるか未確認だが、沖縄島中南部、宮古、八重山の方言にはみられない。

=kuse:は、他のとりたてのくつつきと同様、名詞について主語や補語、状況語などをとりたてることも、述語になる動詞や形容詞をとりたてることもできる。

- 38) <sup>J</sup> tigami=ja p'upp'u:-ga=kuse: hattzura.  
 (手紙は 祖父がコソ 書くのだろう。)
- 39) <sup>J</sup> neNgadzo:ja p'upp'u:-ga=kuse: hattzara.  
 (年賀状は 祖父は 書いたのだろう。)
- 40) <sup>J</sup> p'upp'u:ja neNgadzo:=kuse: hattzura.  
 (祖父は 年賀状を 書くのだろう。)
- 41) <sup>J</sup> ?unu sak'ija fiNfi:-ga=kuse: numi:ra.  
 (その 酒は 先生が 飲むのだろう。(飲むのは先生なんだろう))
- 42) <sup>J</sup> ?ari-ga=kuse: hattzara.  
 (あいつが 書いたのだろう (書いたのはあいつだろう。))

- 43) <sup>レ</sup> p'upp'u:ja neNgadʒo:=kuse: hatʒura.  
 (祖父は 年賀状を 書くだらう(祖父が書くのは年賀状だらう。))
- 44) <sup>レ</sup> p'app'a:ja naha-tʒi=kuse: ʔidʒa:ra.  
 (祖母は 那覇に 行ったのだらう(祖母が行ったのは那覇だらう。))
- 45) <sup>レ</sup> kinu:=kuse: nuda:ra.  
 (昨日 飲んだんだらう(飲んだのは昨日だらう。))

=kuse:は、おしはかり文の述語を焦点化することができる。完成相の述語動詞のばあいは、連用形(第一中止形)に=kuse:を後接してra推量形の補助動詞su:raをくみあわせ、述語形容詞のばあいは、sa連用形に=kuse:を後接してra推量形の補助動詞ʔairaをくみあわせる。

- 46) <sup>レ</sup> ʔma:ni: ʔutzuk'iba tui=kuse: su:ra.  
 (そこに 置いておけば とるだらう。)
- 47) <sup>レ</sup> ʔanu jama:ja tak'asa=kuse: ʔaira.  
 (あの 山は 高いだらう。)

=kuse:は、ra推量形を述語にもつおしはかり文にあらわれるので、ra推量形と呼応しているといえそうである。ただし、ra推量形は、確認要求をあらわす文やうたがいをあらわす文の述語としても使用されるので、=kuse:とra推量形が一对一に対応しているというわけでもない。

=kuse:を有しない泉崎方言、安慶名方言、仲地方言、下里方言、四箇方言のおしはかり文のばあい、=duがあってもなくても述語の形式はhadʒi推量形、padʒi推量形でかわらないので、そこに係り結びをみとめる必要はない。謝名方言のばあい、padʒi推量形を述語にもつおしはかり文は、=duの有無にかかわらず述語の形式はかわらない。

いっぽう、ra推量形を述語にもつ文には、=kuse:があらわれるので、係り結びがあるようにみえる。ra推量形は、先述したように確認要求やうたがい文にもあらわれる。おしはかり文において=kuse:とra推量形は呼応してあらわ

れるが、=kuse:がra推量形を要求（支配）しているのか、ra推量形が=kuse:を要求（支配）しているのか、現段階では確認できない。=kuse:をもつおしはかり文と=duをもつおしはかり文にどのようなちがいがあのかの検討をふくめ、今後の課題である。

## 5. たずねる文における焦点化と呼応する述語の形式

たずねる文には、肯否たずね文と疑問詞たずね文とがある。泉崎方言や安慶名方言、謝名方言などのばあい、肯否たずね文と疑問詞たずね文の両者に専用の述語形式があって、述語の形式によって両者を区別することもできる。

肯否たずね文と疑問詞たずね文は、それぞれにあらわれる焦点化の助辞や焦点化する形態論的なてつづき、呼応する述語の形式などがことなる。また、下位方言ごとに肯否たずね文と疑問詞たずね文にあらわれる焦点化の助辞や焦点化する形態論的なてつづき、呼応する述語の形式などにちがいがみられる。

### 5.1 肯否たずね文における焦点化と呼応する述語の形式

謝名方言、安慶名方言、四箇方言の肯否たずね文には=duがあらわれ、下里方言の肯否たずね文には=nuが、仲地方言の肯否たずね文には=ruがあらわれる。いくつかある可能性の中のひとつのなかからとりだしたものごとをさしだす文の部分に=du、=nu、=ruを後接して焦点化し、話し手の仮の判断としてさしだして、聞き手に確認してたずねる。

安慶名方言のばあい、=duを後接した文の部分と呼応して強調たずね形があらわれる。強調たずね形は、強調形に質問の意の接辞-iをつけたものである<sup>12)</sup>。謝名方言のばあい、=duに呼応する専用形式はなく、=duの無い肯否たずね文と同じ述語形式になる。四箇方言は=duに呼応して強調形があらわれる。

- 48) ?e:kiNtʃu=N nu:=N ?paraNdo:na:,. ?ataime:-nu harusa:=du jaru.  
(金持ちでも 何でも ないよ。 普通の 百姓なんだ。  
jaʃiga, na:=ja kurika:-nu ttʃu=du jaNʃe:rui. 多幸山P.30  
(しかし、あなたは このあたりの 人で いらっしゃいますか。)

- 49) <sup>A</sup> kaN<sup>bano</sup>: ?ja:-ga=du kat<sup>fu</sup>rui?  
 (看板は 君が 書くのか?)
- 50) <sup>A</sup> ?anu kaN<sup>bano</sup>: ?ja:-ga=ru kat<sup>fu</sup>rui?  
 (あの 看板は 君が 書いたのか?)
- 51) <sup>A</sup> na:da mi:sarumuN<sup>nu</sup>. jugurito:gu<sup>tu</sup>=du f<sup>iti</sup>:rui?  
 (まだ 新しいのに。 汚れているから 捨てるのか?)
- 52) <sup>A</sup> harufiguto: ta:ga saga? ?ja:-ga=ru sarui?  
 (畑仕事は 誰が した? おまえが したの?)
- 53) <sup>A</sup> watta: kkwa=ja gakko:-Nkai=du ?Ndzo:rui?  
 (うちの 子は 学校に いつているの?)
- 54) <sup>A</sup> na:da he:sarumuN<sup>nu</sup>, ?i:na niNdzi:=du surui?  
 (まだ 早いのに、 もう 寝るの?)
- 55) sui-nu mu:tuja:-Ndi ?i:ne:, ?aN<sup>si</sup>:ne: na:=ja suiN<sup>tsu</sup>=du jarui.  
 (首里の 本家と いうと、 そうすると、 あなたは 首里の人ですか。)

多幸山P.32

いっぽう、謝名方言のばあい、強調たずね形をもたず、肯否たずね文には =duがあってもなくても、述語の形は肯否たずね文の専用の肯否たずね形があらわれる。したがって、謝名方言の肯否たずね文には係り結びがみられないとってよさそうである。

- 56) <sup>μ</sup> ?ja: tigami=du hatzuN<sup>na</sup>:?  
 (君、 手紙を 書いているの?) 何か書いているようだが、確認できない。書いている人に何を書いているのか、手紙を書いているのかをたずねる。
- 57) <sup>μ</sup> ?ami=du puN<sup>na</sup>:?  
 (雨が 降っているの?) 雨が降っているようだが、部屋にいて直接確認できず、そとにいる人に質問する。

58) <sup>レ</sup> nu:ditzi k'a:t'aga? ja:sa=du ?ait'i:.

(どうして 食べたんだ? 腹が空いていたのか。)

?at'arase:t'u=du k'a:t'aru. ja:saja neNt'aNdo.

(もったいないから、食べたんだ。 腹はすいていなかったよ。)

59) <sup>レ</sup> giNk'o:nu fatt'a:-ga=du ?atzumi?

(銀行の シャッターが 開きつつあるの?)

60) <sup>レ</sup> ?ana:=du puNna:?

(穴を 掘っているの?)

61) <sup>レ</sup> ?ja: sak'i=du numiNna:?

(君、 酒を のんでいるの?)

?iN, sak'i: numiN.

(うん、酒を のんでいる。)

62) <sup>レ</sup> ?ja:-ga=du ?anu kaNbaNja hattzi: ?

(君が あの 看板を 書いたのか?)

安慶名方言の肯否たずね文も、謝名方言と同様、=duを後接した文の部分があっても、いいおわりの述語をかみならずしも強調たずね形にせず、肯否たずね形のあらわれるばあい(次の63)の例)がある。おなじく沖縄芝居の脚本でも=duをふくむ肯否たずね文の述語が強調たずね形以外の形式(次の64)の例)でもあらわれる。したがって、=duが強調たずね形を要求(支配)しているとはいえない。しかし、強調たずね形を述語にもつ文には=duがあらわれるので、強調たずね形は、=duと呼応してあらわれる、あるいは=duを要求(支配)しているといえそうである。

強調たずね形を述語にもつたずね文においても強調たずね形をもたないたずね文においても=duの後接した文の部分によってさしだされるものごとをとりたてるといってはたつきはかわらない。

63) <sup>4</sup> kaNbano: ?ja:-ga=du katfuNna: ?

(看板は 君がソ 書くの?)



- 64) na:=ja ʔuN-nu wassate:sa. ʔaNfi nu:gana turari:=du ʃiNso:tʃi:ʔ  
 (あなたは 運が 悪かったんだ。それで、何か 取られたんですか。) 多幸山p.42.

下里方言の肯否たずね文には=nuが、仲地方言の肯否たずね文には=ru<sup>13)</sup>があらわれる。肯否たずね文専用の焦点化助辞=nu、=ruは、後接させた文の部分を焦点化させるが、特定の述語形式との呼応はみられない。下里方言の述語kaks(書く)も、仲地方言の述語kaf(書く)もいきり文の述語と同じ形式であり、=nu、=ru、そして、=duの有無にかかわらずおなじ述語の形式があらわれるので、ここでも係り結びがみられない。

- 65) <sup>S</sup> tigamju:=ba? vva-ga=nu kaks?  
 (手紙は 君が力 書く?)

- 66) <sup>N</sup> tigamju:=ba: ja-a=ru kaf?  
 (手紙は 君が力 書く?)

四箇方言の肯否たずね文には=duがあらわれ、文末の述語には強調形があらわれる。肯否たずね文に=duがあらわれるのは、謝名方言や安慶名方言とおなじだが、文末の述語に強調形があらわれるのは、肯否たずね文の専用形式があらわれる謝名方言、安慶名方言ともことなる。

四箇方言のばあい、いきり文にも肯否たずね文にも=duがあらわれ、文末の述語が強調形になるので、=duと強調形とのあいだに係り結びの関係があるといえるだろう。

- 67) <sup>L</sup> tigate: wa:n=du kaku?  
 (手紙は 君が力 書く?)

- 68) <sup>L</sup> wa: ʃidʒanu me:kai aN=du aNku?  
 (おまえは 年上の 方に そう 言うの。)

## 5.2 疑問詞たずね文における焦点化と呼応する述語の形式

謝名方言でも安慶名方言でも疑問詞たずね文には=duも=gaもあらわれない。両方言とも疑問詞に呼応して文末の述語にgaのついた疑問詞たずね文専用形式があらわれる。

69) <sup>J</sup> hoimuN=ja taru-ga ?itʒuga?

(買い物は 誰が 行く?)

tara:-ga ?itʒuN.

(太郎が 行く。)

70) <sup>J</sup> ?ja: nu: numiga?

(君、何を のんでいるの?)

waNna:. tʃa: numiNjo:.

(私か。お茶を のんでいるよ。)

71) <sup>J</sup> nu: mudaga?

(何を 飲んだの?)

sak'i nudaN.

(酒を 飲んだ。)

72) <sup>J</sup> p'upp'u: =ja da:ni 'uit'aga?

(祖父は どこに いた?)

73) <sup>J</sup> waN=ja nu: numi:t'aga?

(私は 何を 飲ミヨッタか?)

?ja:=ja bi:ru numi:t'aN.

(君は ビールを 飲ミヨッタ。)

74) <sup>J</sup> tigami=ja taru-ga hatʒuga?

(手紙は 誰が 書くか?)

75) <sup>A</sup> tigate: ta:-ga katʒuga?

(手紙は 誰が 書くか?)

76) ?i:bi=ja ma:-Nkai u:ri:ga. ?i:bi=ja ?utʃi-Nkai=du magajuru. 諺042

(指は どこに 折れるか. 指は 内にコソ 曲がるのだ。)

仲地方言と下里方言の疑問詞たずね文には疑問詞に後接して=gaがあらわれる。

仲地方言の=gaは、疑問詞に後接してあらわれて疑問詞を焦点化させる機能を有するが、特定の述語形式が呼応することはなく、断定形が述語になる。いきり文にもおしはかり文には=duがあらわれ、肯否たずね文には=ruがあらわれ、疑問詞たずね文には=gaがあらわれるが、いずれも断定形が述語にあらわれる。=du、=ru、=gaは焦点化の機能は有するが、特定の述語形式を呼応させる（支配する）とはいえない。

下里方言の述語には、用例78)のように断定形kaksが現れたり、用例79)のように疑問詞たずね文の専用の述語形式kakja:が現れたり、用例80)のように断定形に-gaのついた述語形式kaksgaが現れたりする。78)、79)は疑問詞に=gaが後接するが、80)には=gaがついていない。78)の例は、仲地方言の例77)に似るし、79)の例は後述する四箇方言の81)の例に似る。80)の例は謝名方言や安慶名方言の例に似る。みつつの述語形式のつかいわけについては確認できていない。仲地方言と下里方言のさらなる調査、検討が必要である。

77) <sup>N</sup> ja: no:-ju=ga kaf ?

(君は 何をカ 書く?)

78) <sup>S</sup> to:-ga=ga tigamju: kaks ?

(誰がカ 手紙を 書く?)

79) <sup>S</sup> to:-ga=ga tigamju: kakja: ?

(誰がカ 手紙を 書くの?)

80) <sup>S</sup> to:-ga tigamju: kaksga ?

(誰が 手紙を 書くか?)

四箇方言の疑問詞たずね文には疑問詞に=duが後接してあらわれ、疑問詞を焦点化させるが、=duがあっても強調形が文末の述語になるのではなく、疑問詞たずね文専用の述語形式があらわれる。疑問詞たずね文において、四箇方言は、謝名方言、安慶名方言とおなじく、疑問詞と述語の専用形式とが呼応している。=duと強調形が呼応しているとはいえないだろう。

四箇方言の疑問詞たずね文の専用形式は、非過去形と過去形のそれぞれふたつの変種がある<sup>10)</sup>。四箇方言は、疑問詞に=duが後接する。これは疑問詞にいかなる焦点化助辞も後接しない謝名方言、安慶名方言とはことなるが、疑問詞に=gaが後接して焦点化させる下里方言、仲地方言に似る。

- 81) <sup>l</sup> tigate: ta:-N=du kakja ?  
 (手紙は 誰が力 書くの?)
- 82) <sup>l</sup> tigate: ta:-N=du kakuna: ?  
 (手紙は 誰が力 書くの?)
- 83) <sup>l</sup> kunu gufe: ta:-N=du nuNda: ?  
 (この 酒は 誰が力 飲んだ?)
- 84) <sup>l</sup> kunu gufe: ta:-N=du numudana: ?  
 (この 酒は 誰が力 飲んだ?)
- 85) <sup>l</sup> hwa:na:=ba kasanaja:tte dzuma-kai=du harja ?  
 (子どもを おぶって どこに力 行くの?)
- 86) <sup>l</sup> wa:ja:tte unu juski tai-ju mutjiki:tte no:=du ʃa: ?  
 (きみは その 薄の 松明を 持ってきて 何を力 するの?)

四箇方言のばあいには、=duがあっても強調形があらわれるのではなく、疑問詞たずね文の専用の述語形式があらわれることを、鈴木重幸他 (2001) は、つぎのようにのべている。

石垣方言において、とりたてのくつつき (助詞) -duはあたらしい情報をしめす部分につくので、疑問詞には-duをともなうのが普通である。疑問詞に-duがついていてもduむすび形をつかうのではなく、疑問詞むすび形をつかうのが普通である。ただし、文中に疑問詞があっても、duむすび形もちいることができる。

- 87) <sup>l</sup> bana: no:=du sī:.  
 (私は どう しよう。)

- 88) <sup>l</sup> eN=ja no:=du naridejo, kunu sīttsa=N ittukē: no:=du narikaja:de  
 (来年は どうなるのかな。このさとうきびも 一時は どうなるのかあと  
 fuba sī:dasoNga,  
 心配したが、)

疑問詞たずね文の述語が「duむすび形＝強調形」になるばあいと疑問詞たずね文専用の述語形式になるばあいとのちがいについて用例をふやして精査する必要があるが、鈴木重幸他（2001）にあげられている例をみるかぎり、=duを後接させた疑問詞に「duむすび形＝強調形」でむすばれる文は、疑問詞たずね文ではなく、うたがい文的なニュアンスの文である。

疑問詞たずね文の例をみると、疑問詞に=duを後接させて疑問詞たずね文専用の述語形式でむすぶ四箇方言と、疑問詞に=gaを後接させて疑問詞たずね文専用述語形式でむすぶ下里方言とは助辞の形がことなるだけで、助辞の焦点化のはたらきという点ではおなじであろう。泉崎方言や安慶名方言、謝名方言において疑問詞たずね文に焦点化の助辞がいつさいあらわれないのが疑問詞によって焦点化がすでになされているからであるなら、四箇方言や下里方言と逆のあらわれかたをしているが、=gaや=duの焦点化のはたらきゆえの現象であろう。

## 6. うたがい文における焦点化と呼応する述語の形式

安慶名方言、謝名方言の=gaは、うたがい文にあらわれ、=gaの後接した文の部分が焦点化される。=gaに呼応して文末の述語にはra推量形があらわれる。うたがいの文は、かならずしも聞き手のこたえをもとめず、話し手の疑問がさしだされる。うたがい文については各方言で調査をすすめて用例をふやしながら検討をすすめていかなければならない。

- 89) <sup>A</sup> tigame: ta:-ga=ga katfura.  
 (手紙は 誰が力 書くのだろう。)

90) ʃ tigami=ja p'upp'u:-ga=ga hatzura.

(手紙は 祖父がカ 書くのだろうか。)

91) tabisatʃi-uti dʒiNkani=madi turatti na:N ʃiNdo:de:Nna:.

(旅先で 金まで 取られて あなたも たいへんだね。)

ʔaNsugutu, tʃa:ʃi=ga ʃimura, 多幸山p.42

(そうなんだ、 どうすれば いいだろう。)

## 7. 課題

「係り結び」を森重敏（1955）は次のように定義する。

おもに文語において、文の間にはいる係助詞「は」「も」、「ぞ」「なむ」「や」「か」、「こそ」に呼応して、その文を終止する述語である活用語が、それぞれ終止・連体・已然の各活用形をとること。この時、各係助詞を係、呼応する各活用形を結という。

また、亀井孝・河野六郎・千野栄一編（1996）の「係り結び」の項目ではつぎのように定義する。

日本語の古典文語には、「係り結び」とよばれる不思議な統語法があった。先行の語または句に助詞ゾ・ナム・ヤ・カが付くときは、それに続く句の動詞は連体形をとり、助詞コソが付くときは、後続の動詞は已然形をとる、という統語関係で、いずれも後続の動詞は連体形でも已然形でも述語を示し、これらの助詞に先行する部分を強調する。

このような統語関係は、文法的に言えば「支配 (government)」といえる。それは先行する特定の助詞によって後にくる陳述形が文法的に決められる、すなわち、「支配」されるからである。

いずれも、先行の助辞（焦点化助辞）が後続の述語の形式を呼応させ、支配

するという点でおなじである。

琉球方言のばあい、=duは、いいきり文にもおしはかり文にもあらわれる(謝名、安慶名、下里、仲地、四箇)し、肯否たずね文(謝名、安慶名、四箇)にも、疑問詞たずね文(四箇方言)にもあらわれて、焦点化の機能をはたす。そのときの文末の述語の形もさまざまである。=gaは、疑問詞たずね文(下里、仲地)にあらわれるが、特定の述語形式との呼応・支配の関係をもたない。=nu(下里)、=ru(仲地)は肯否たずね文にあらわれるが、やはり特定の述語形式との呼応・支配の関係をもたない。=kuse:(謝名)は、おしはかり文にしかあらわれず、ra推量形と呼応・支配関係があるようにもみえるが、ra推量形は、=kuse:をふくまない文にもあらわれる。四箇方言では、=duは強調形を支配しているようにみえる。しかし、疑問詞たずね文で=duがあっても疑問詞たずね専用の述語形式があらわれるので、厳密には=duが強調形を支配する/呼応させるとはいいがたい。

泉崎方言、安慶名方言、謝名方言、仲地方言、下里方言、四箇方言を通じていえることは、=du、=ga、=nu、=ru、=kuse:は、特定のモダリティーをあらわす述語形式を文末にもつ文のなかで、特定の文の部分に後接し、その文の部分のあらわすものごとを焦点化させる機能を有した助辞ではないかとかんがえる。先に引用した定義にしたがうと、琉球方言の=du、=ga、=nu、=ru、=kuse:を係助辞とみることはできないのではないだろうか。もし、係り結びがあるとするなら、特定のモダリティーをあらわす述語形式を述語にもつ文の部分焦点化させたいとき、述語形式が=du、=ga、=nu、=ru、=kuse:を要求(支配)するとみることが可能なのではないだろうか。

「係り結び」とよばれる現象がどういうものなのか、琉球方言のさらなる精査と比較、検討をとおしてかんがえなければならない。さらにおおくの下位方言を調査し、ほかにどんな焦点化助辞があり、どんなふるまいをするかを調査することが緊急の課題である。そのとき、=du、=ga、=nu、=ru、=kuse:のあらわれない文と比較しながら検討することが重要であろう。調査による資料収集は、現在の変異と分布がどのように形成されたかを知るための手がかりを確保するだけでなく、消滅危機方言としての琉球方言の記録・保存と継承・普及

のための材料を確保することにもつながる。

## 付記

本稿は、第2回琉球語ワークショップ（2010年8月6日7日、於琉球大学）での口頭発表、琉球大学琉球アジア社会文化研究会の研究会（2010年10月30日、於琉球大学）での口頭発表をもとにしている。発表の席上で貴重な助言をくださった方々に感謝申し上げます。英文タイトルと英文要旨は、島袋盛世さんに訳していただいた。なお、本稿は、文部科学省科学研究費（基盤研究(B)課題番号20320066「南琉球方言の文法の基礎的研究」（代表者狩俣繁久）の研究成果の一部である。

### 【注】

- 
- <sup>1</sup> 助辞=du、=ga、=nu、=ru、=kuse:は、主語、補語、状況語、述語をとりたてることはできるが、連体修飾語、連用修飾語、独立語を焦点化することはできないようである。
  - <sup>2</sup> 謝名方言のとりたて助辞bikei（ばかり）は、ja、Nなどのとりたて助辞と同じく、格の形に後接するが、それだけでなく、ハダカの形にbikeiを後接させ、さらにその後ろに格助辞を後接させることができる。  
ʔuttu-ni=bikei ki:ruN. (弟にばかり あげる。)  
ʔuttu=bikei-ni ki:ruN. (弟ばかりに あげる。)  
ʔuttu-ni=bikei=du ki:ruru. (弟にばかりコソ あげる。)  
×ʔuttu=bikei-ni=du ki:ruru.  
ʔuNna munu=madi-ja taruN kamaN.  
(そんな ものまでは 誰も 食べない。)
  - <sup>3</sup> かりまたしげひさ(2010)を参照。
  - <sup>4</sup> 鈴木重幸(1972)は、標準語の「とりたて」をつぎのようにのべている。



名詞は格によって文のなかの他の単語に対することがら上の関係（素材＝関係的な意味）をあらわすが、名詞の格、とくに連用的な格は、とりたての形が分化していて、そこに表現されているものごとが、現実にある同類のものごとに対してどのような関係にあるかを話し手のたちばからあらわしわかる。（中略）とりたての形は、主題の提示や文の部分の強調などの機能をもはたす。

琉球方言の=du、=ga、=nu、=kuse:も=ja、=N、=maiなどおなじく「そこに表現されているものごとが現実にある同類のものごとに対してどのような関係にあるかを話し手のたちばからあらわしわかる」機能と、「主題の提示や文の部分の強調」をあらわす機能をもっている。本稿では鈴木（1972）の規定にしたがう。

- <sup>5</sup> ことわざ資料は、S.R.氏（T3生）を話者にした外間美奈子（1994）からぬきだした。沖縄芝居の脚本は、沖縄芝居の名優真喜志康忠氏の脚本の一部を活字化した月野美奈子・島田優子（1996）からぬきだした。
- <sup>6</sup> 奥田靖雄（1991）の文の分類にしたがう。奥田（1991）の「さそいかけ文」の名称を「はたらきかけ文」に変更している。琉球方言におけるまちのぞみ文にどのようなものがあるのか、まったく把握できていないので、本稿ではとりあげない。
- <sup>7</sup> 四箇方言についておなじことがいえるのかは未確認である。
- <sup>8</sup> 四箇方言の断定形と強調形のがちがい、活用形のつくり方については、鈴木重幸他（2001）がくわしい。
- <sup>9</sup> “終止形”、“連体形”は検定教科書文法のものであり、前者は非過去の断定形で、後者は非過去の連体形である。
- <sup>10</sup> ra推量形が末尾にあった\*muを脱落させた形式であることについては、かりまたしげひさ・島袋幸子(2007)でややくわしくのべた。かりまたしげひさ・島袋幸子(2007、p23)を参照いただきたい。
- <sup>11</sup> ウラ=クス ガンチ=ドゥ イューラ。 菊千代・高橋俊三著（2005）  
（あなたコソ そう 言うであろう。）

- <sup>12</sup> 接辞-iは、肯否たずね形のnum-imi（飲むか）、nud-i:（飲んだか）にもふくまれている。
- <sup>13</sup> 下里方言の=nu、仲地方言の=ruの由来、宮古島の他方言での類似の助辞の存在などについては不明である。
- <sup>14</sup> くわしくは鈴木重幸他（2001）を参照。

### 【参考文献】

- 上村幸雄（1963）「首里方言の文法」『沖縄語辞典』国立国語研究所編、pp.58～86、東京。
- 内間直仁（1986）「係り結びのかかりの弱まり－琉球方言の係り結びを中心に－」『沖縄文化研究』第11号、法政大学沖縄文化研究所、pp.223～244、東京。
- 沖縄芝居作業グループ編（1993）「沖縄芝居テキスト・喜歌劇『豊年』」『琉球列島における音声の収集と研究Ⅱ 沖縄言語研究センター研究報告2』沖縄言語研究センター、pp.233～258、沖縄。
- 奥田靖雄（1991）「構文論講義プリント」未公刊資料
- 金田章宏（2001）『八丈方言動詞の基礎研究』笠間書院、東京
- 亀井孝・河野六郎・千野栄一編（1996）『言語学大辞典 第6巻 述語編』
- かりまたしげひさ（2010）「琉球方言の焦点化の助辞－形態論的なてつづきをかながえる－」『琉球アジア社会文化研究』13号、pp.19～35、琉球大学琉球アジア文化研究会、沖縄。
- かりまたしげひさ（2009）「方言文法の記述研究－消滅と変容をまえにして」『日本語研究の将来展望』国立国語研究所、国際学術フォーラム、pp.44～47、東京。
- かりまたしげひさ（2008）「名護市幸喜方言の名詞の格＝とりたて－ga格、nu格、ハダカ格、jaのとりたて形－」『日本東洋文化論集』第14号、pp.1～80、沖縄。
- かりまたしげひさ・島袋幸子（2007）「沖縄方言のとりたてのくつつきとかかりむすび－今帰仁謝名方言と具志川安慶名方言のばあい－」『日本東洋文化論集』第13号、pp.1～29、沖縄。

- 菊千代・高橋俊三著 (2005) 『与論方言辞典』 笠間書院、東京
- 佐藤里美 (2010) 「述語のひろがりー合成述語を中心に」 『国文学 解釈と鑑賞』  
7月号、pp.50～59、東京。
- 下地理則 (2010) 「伊良部島方言における述語部分の焦点化について」 『地球研  
記述言語研究』 第2号、pp.115～133、京都。
- 下地賀代子 (2010) 「石垣・宮良方言の係助辞duの文法的役割ー多良間島方言  
との比較からー」 1月23日沖縄言語研究センター定例研究会発表資料、pp.1  
～12、
- 鈴木重幸・宮良安彦・登野城るり子・狩俣繁久・島袋幸子 (2001) 「石垣方言  
のAspectとテンス」 『琉球八重山方言の動詞の研究ー石垣方言の動詞の  
Aspectとテンスー』 科学研究費成果報告書、代表者・鈴木重幸、拓殖大  
学、p.518、東京。
- 鈴木重幸 (1972) 『日本語文法・形態論』 むぎ書房、東京。
- 月野美奈子・島田優子 (1996) 「沖縄芝居脚本のテキスト化」 『那覇の方言 那  
覇市方言記録保存調査Ⅲ 沖縄言語研究センター研究報告5』 沖縄言語研究  
センター、pp.1～234、沖縄。
- 仲宗根政善 (1983) 『沖縄今帰仁方言辞典』 角川書店、p.885、東京。
- 外間美奈子 (1994) 「那覇方言の音声資料とテキスト化ーことわざ・祈願 (ウ  
グァン) ・物売りの言葉などー」 『那覇の方言 那覇市方言記録保存調査 I  
沖縄言語研究センター研究報告3』 沖縄言語研究センター、pp.16～169、沖縄。
- 宮城信勇 (1977) 『八重山ことわざ辞典』 p.551、沖縄タイムス社、沖縄。
- 森重敏 (1955) 「係結」 『国語学辞典』 東京堂、pp.139～140、東京。